

令和元年6月12日現在

機関番号：33912

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02417

研究課題名(和文) ドイツ語圏現代文学における間文化性の研究

研究課題名(英文) Interculturality of contemporary german literature

研究代表者

土屋 勝彦 (Tsuchiya, Masahiko)

名古屋学院大学・国際文化学部・教授

研究者番号：90135278

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：東欧出身の越境作家たちと南欧出身の越境作家たちとの比較研究により、異邦人としての意識、複数言語混淆の実相、新たな言語表現とナショナルリティとの確執が共有される特徴として確認できる。オーストリアでは地方のバナキュラーな言語文化性と、多文化多民族性を有していた歴史的背景から考えるとさらにその多声性と多層性が見られる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の研究成果と比較して本研究は、ドイツ語圏のなかでも、文化交流が歴史的にも実践されてきたオーストリアを中心に据えることで、いわばマイナー文学の方向から移民文学や越境文学をとらえ直す点で独創性がある。比較の視点を「越境性」と「言語混淆性」に着目し、それが従来論じられてきたような、ポストコロニアル的あるいはポストモダン的な視点と交差するあり方とその特質を解明した。東欧的なエトスと南欧的なエトスがドイツ語圏文化に及ぼす影響のあり方と特徴を明らかにし、そこから移民文学や亡命文学、離散の文学、マイナー文学といった従来の定義を超えて、インターカルチュラルな経験の諸相とその文学様式を解明した。

研究成果の概要(英文)：Transcultural writers from Southern and Eastern Europe share a number of experiences such as the consciousness of being a foreigner, the mixing of languages and cultures, new linguistic forms of expression and innovative use of words, discord and conflicts between nationalities, a mobile identity. At the same time, layered and polyphonic characteristics can be discovered in the the vernacular cultures and languages that form Austrian literature's multiethnic background.

研究分野：ドイツ語圏現代文学

キーワード：越境文学 移民文学 インターカルチュラルリティ マイナー文学 ポストコロニアリズム ポストモダニズム ドイツ語圏文学 アイデンティティ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで越境文学の諸問題に関して、ドイツ語圏文学を超えて英語圏、東欧語圏、フランス語圏などの越境文学研究者たちとの共同研究を行ってきた。その成果として『越境する文学』（水声社、2009年）『反響する文学』（風媒社、2011年）を上梓し、その後、毎年科学研究費Bによる越境文学シンポジウムを開催し、その報告書をまとめてきた。最近では2013年11月に、ドイツ語圏の越境文学に関するシンポジウム「文学における間文化性 地域的、国民的、大陸的アイデンティティの諸相」を開催し、Ilma Rakusa, Terezia Mora, Sabine Scholl, Anna Kim, Leopold Federmair, Yoko Tawada の諸氏を招待して、複数言語の狭間に生きる現代作家たち、あるいは多言語の海に浮遊する多層的多元的な越境作家たち、彼らの目に映るアイデンティティ、異邦性、他者性、国民国家とは何か、また彼らがドイツ語作家であることの意味は何か、規範的なドイツ語表現からの逸脱と革新、新たな表現の可能性はどのように開かれるか、などアクチュアルな文学的諸問題について精力的に討議した。またその成果を科研報告書としてまとめ、現代ドイツ文学の一角を占める「移民文学」ないし「越境文学」についての知見を深めることができた。

こうした研究成果をもとに、申請者は今回さらに多言語性ないし複数文化を内包する諸作家の個別的研究を進展させながら、オーストリア現代文学の諸作家との比較研究に進もうと考える。具体的には、Vladimir Vertlib, Ilija Trojanow, Julya Rabinowich, Terezia Mora, Ilma Rakusa といった東欧出身の作家たちの諸作品と Ann Cotten, Sabine Scholl, Anna Kim, Lydia Mischkulnig, Sabine Gruber といったオーストリアの多言語的な越境作家たちとの比較研究である。前者が東欧的な風土性と歴史性をドイツ語圏文化に参入させ、スラブ的な文化とドイツ語圏文化との葛藤と融合をもとに作品を創出しているのに対して、後者はアメリカ合衆国やフランス、イタリア、スロヴェニア、あるいは韓国といった主に南欧文化圏の影響下に独自の複数文化を体現している作家たちである。こうした作家たちの作品比較から、異質性、異邦性、他者性、移動するアイデンティティの諸問題をさらに比較考察する。これは中欧文化圏を体現するオーストリア文学における汎ヨーロッパ主義的な文学潮流のあり方を、越境作家たちの文学世界に読み解く試みであり、またグローバル化された文学世界に、ローカルな風土性を溶け込ませつつ、異邦人としての移動するアイデンティティを現出し、そこに新たな言語表現を創出し、ドイツ語圏の国民文学的規範を超克しようとする文学潮流のひとつでもある。このようないわゆるグローカリゼーションの様相は、世界の文化現象の一特徴を示している。その表現特徴として、ハイブリディティ（異種混濁性）やコラージュ、ポリフォニーなどが見られる。母語の干渉を受けて創出される新たな言語表現形式のみならず、たとえばイスラム出身国（トルコやペルシャなど）の伝統文化たる古い神話や民話などの口承文化の影響下に生まれる新たな物語性や、さまざまな階層言語の影響を受けた表現がその背景にある。オーストリアの場合、方言や地域語、とくにケルンテンやチロルなど諸地域のバナキュラーな言語文化特性の影響も受けつつ独自のドイツ語圏文学を形成してきた歴史的経緯を踏まえ、そこにさらに東欧や南欧の文化を背景に持つ作家たちが独自に形成してきた異邦な風土性をどのような表現形式に提示し、新たな汎ヨーロッパ性を体現しているのかを明らかにする。

2. 研究の目的

具体的には、ユダヤ系ロシア人ドイツ語作家であるヴェルトリプの作品において表現されているように、移民を背景とする作家の自己洞察において、母語も獲得言語も浮遊した言語となり、自己表現への精確さを求められることで発見できる虚構的世界があり、それは普遍

的な文学言語ともなりうるという立場から創造していく。「よるべなさ」や他者性を強みとして文学に向かう姿勢は、ラビノヴィチの作品では、ロシア系移民や難民女性への精神療法的交流によって、言語的自己治療を促す視点につながっている。ハンガリーからの移民作家モーラの場合には、もともとオーストリア・ハンガリー二重帝国の時代から文化的な親和性を持つがゆえに、大きな齟齬感はないにせよエステルハージーの翻訳家でもある背景から、言語的な越境性が見られる。ブルガリア出身のトロヤノフに至っては、アフリカやインド文学への傾倒からメッカへの巡礼紀行に至るまで、実に広大な世界文学への架橋を実践してきた作家であり、たんなる複数文化の体现者に留まらない社会政治活動も行っている。スロヴェニア人の父とハンガリー人の母を持ちロシア文学を専攻したスイス在住のラクーザの場合にも、その多言語性から由来する汎ヨーロッパ性が顕著であり、複数文化に収まらない視点を有する。このような東欧系の作家たちの諸作品を、英独バイリンガル詩人のコッテンや、仏独英語を駆使する作家ショル、スロヴェニア国境のケルンテン州に生まれたミッシュクルニク、あるいはイタリア文化に根を下ろすグルーパーといったオーストリア人越境作家たちの諸作品との比較を通じて、ドイツ語圏の間文化性の諸問題を汎ヨーロッパ的な視点から解明することが本課題の目的である。

3. 研究の方法

2015年度と2016年度は、ウィーンとベルリンに出張し、トロヤノフやモーラ、ラビノヴィチ、ショル、ラクーザ、キムといった当該作家たちとのインタビューを通して越境性の諸問題について明らかにした。ホスト国における異邦人としての意識がどのように作品に現れていったのか、言語混淆のあり方についてどのような経験と創意がありえたのか、新たな言語表現とナショナリティの確執についてどのように考えているのか、など実際の面談と作品分析を照らし合わせて考察した。国立図書館や大学図書館での資料収集も行った。また研究者としては、ウィーン大学比較文学のイヴァノヴィチ教授、同じく日本学のハイン教授らとも意見交換し、討議した。さらに図書館や美術館での資料収集も行った。2017年度は、リディア・ミッシュクルニク、アン・コッテン、レオポルト・フェダマイア、ツヴェタ・ゾフロニーヴァという越境作家たち4名を招待して、国際シンポジウムを名古屋で開催した。その際、国内外の専門研究者にも呼びかけ、世界文学語圏横断ネットワーク研究会に関わる研究者たちの協力を得て、ドイツ語圏文学の越境性および間文化性の問題を広い視野から共同討議した。2018年度は、研究のまとめとして、再度ヨーロッパに渡り、ウィーン大学やベルリン自由大学での共同討議およびワークショップに参加し、ザビーネ・ショルやテレツィア・モーラなど当該作家たちとも再度面談した。また作家ミレーネ・フラシャルの朗読討論会やオーストリア現代文学ゼミナールでコッテンとの対談を行い、日本独文学会特集号「移動する文学」の編集にも従事した。最後に得られた知見を諸論文および研究報告としてまとめた。

4. 研究成果

当該作家たちの具体的作品分析を継続しつつ、比較の視点を「越境性」と「言語混淆性」に着目し、それが従来論じられてきたような、ポストコロニアル的あるいはポストモダンの視点と交差するあり方とその特質を解明した。さらにその作品背景にあるヨーロッパ移民史の流れを諸作品のなかに確認しつつ、ドイツ文学史およびオーストリア文学史のなかでの文学的位置づけをも考察した。東欧的なエトスと南欧的なエトスがドイツ語圏文化に及ぼす影響のあり方と

特徴を明らかにしつつ、そこから汎ヨーロッパ主義的な文学観へ架橋する世界観を考究した。そこから移民文学や亡命文学、離散の文学、マイナー文学といった従来の定義を超えて、世界文学につながるインターカルチュラルな経験の諸相とその文学様式を解明することができた。従来の研究成果と比較して本研究は、ドイツ語圏のなかでも、文化交流が歴史的にも実践されてきたオーストリアを中心に据えることで、いわばマイナー文学の方向から移民文学や越境文学をとらえ直すところに特徴がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

2018 年度

1. Masahiko Tsuchiya Mehrsprachigkeit in der japanischen und deutschsprachigen Literatur Ein Gespräch mit Ann Cotten 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第 55 巻 第 1 号 69-88 doi/10.15012/00001107
2. Masahiko Tsuchiya Ausbruch aus der Routine, Erzählperspektive, Arbeitsrhythmus, Japan-Motiv, Feminismus, Spurensuche u. a.: Interview mit Terézia Mora und Sabine Scholl 名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第 30 巻 第 2 号 106-124 doi/10.15012/00001169

2017 年度

3. 土屋勝彦 オーストリア現代文学と越境文学 二つのシンポジウムを終えて 名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第 29 巻 第 1 号 77-82 doi/10.15012/00000961
4. Masahiko Tsuchiya (Hrsg.) Texte der Vorträge von vier Autoren beim Symposium „Interkulturalität und Japan“ 名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第 29 巻 第 2 号 95-128

2016 年度

5. Masahiko Tsuchiya Zur Literatur, Übersetzung, Zweisprachigkeit u. a. Interview mit Terezia Mora 名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第 27 巻 第 2 号 149-161 doi/10.15012/00000668
6. 土屋勝彦 研究所プロジェクト「越境の文学」研究について 名古屋市立大学 人間文化研究所年報 11 号 28 - 34

2015 年度

7. Masahiko Tsuchiya Österreichische Autorinnen und Autoren in Japan 名古屋学院大学論集 言語・文化篇 第 27 巻 第 1 号 67-76 doi/10.15012/00000609
8. Masahiko Tsuchiya Kleine Beiträge zur Herzensbildung Ein Interview mit Leopold Federmair 名古屋学院大学論集 人文・自然科学篇 第 52 巻 第 1 号 79-95 doi/10.15012/00000595

〔学会発表〕(計 8 件)

1. 土屋勝彦 越境文学から教養小説へ 中京大学文化科学研究所 2017 年 12 月
2. Masahiko Tsuchiya Das Symposium "Interkulturalitaet und Japan" 企画・司会 科研費による国際シンポジウム 2017 年 10 月

3. 土屋勝彦 シンポジウム「ポスト・ハプスブルク神話 グローバリゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学」企画・司会 日本独文学会春季研究発表会(日本大学) 2017年5月
4. 土屋勝彦 シンポジウム「森鷗外と多和田葉子」企画・司会 日本比較文学会(山形大学) 2017年6月
5. 土屋勝彦 研究所プロジェクト「越境の文学」研究について 名古屋市立大学人間文化研究所「人間、地域、共生」をめざして 2015年12月
6. 土屋勝彦 研究所プロジェクト「越境の文学」研究について 名古屋市立大学人間文化研究所「人間、地域、共生」をめざして 2015年12月
7. 土屋勝彦 シンポジウム「文学はどこへ向かうのか ドイツ語圏越境文学の諸相と可能性」企画、司会、コメント 日本独文学会春期研究発表会(武蔵大学) 2015年5月
8. Masahiko Tsuchiya Österreichische Autorinnen und Autoren in Japan Österreichische Gesellschaft für Literatur in Wien 2015年5月

〔図書〕(計 3件)

1. 土屋勝彦(編著) ポスト・ハプスブルク神話 グローバリゼーションとローカルな土着性の狭間に動くオーストリア現代文学 (編集) 日本独文学会研究叢書 129号 2018年5月
2. 土屋勝彦(編著) 国際シンポジウム「インターカルチュラルリティと日本」報告記録集(編集) 科研費報告書 2018年3月
3. 土屋勝彦(編著) 文学はどこに向かうのか ドイツ語圏越境文学の諸相と可能性 (編集) 日本独文学会研究叢書 113号 2016年5月

〔その他〕

ホームページ等

<http://doitsubunka.zouri.jp/Germany.html>

https://www.ngu-kenkyu-db.jp/V02010_choord.php?PARAM=2351F9

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。